



# 静岡県議会報告

## 令和4年1月号



自民改革会議 **五輪会**  
静岡県議会議員

# おち あい しん ご 落合慎悟



地域の声を県政に反映  
ご意見ご要望をお聞かせください。



### 11月17～19日 福島イノベーション・コースト構想 主要プロジェクト視察

「福島イノベーション・コースト構想」は、東日本大震災及び原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業回復のために、新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクト。

|   |  |   |
|---|--|---|
| <b>廃炉</b><br>国内外の英知を結集した技術開発<br>廃炉作業などに必要な実証試験を実施する「福島遠隔技術開発センター」                       | <b>ロボット・ドローン</b><br>福島ロボットテストフィールドを中核にロボット産業を集積<br>陸・海・空のフィールドロボットの使用環境を再現した「福島ロボットテストフィールド」 | <b>医療関連</b><br>技術開発支援を通じ企業の販路を開拓<br>「医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター」 |
| <b>エネルギー・環境・リサイクル</b><br>先進的な再生可能エネルギー・リサイクル技術の確立<br>再生可能エネルギーの導入促進、連系する共用送電線を整備し導入を加速化 | <b>農林水産業</b><br>ICTやロボット技術等を活用した農林水産業の再生<br>ICTを活用し農業モデルの確立に向けた様々な業務加工用野菜の栽培                 | <b>航空宇宙</b><br>「空飛ぶクルマ」の実証や関連企業を誘致<br>「航空宇宙フスタック」             |



11/19福島県庁で「福島イノベーション・コースト構想」について、経緯から説明を受けた。

浜通り地区は津波災害だけでなく原発災害の帰宅困難地域に指定され、企業は廃業・撤退、住民は強制的転居と、社会経済全体が崩壊した。

政府は放射能汚染除去を進め、浜通り地区の復興のために構想を立上げ、6つの主要プロジェクトを推進している。

### 11/19 廃炉環境国際共同研究センター

福島第一原発の廃炉を加速するための国際的な廃炉研究開発・人材育成モックアップ試験施設等を活用した遠隔操作機器・装置の開発、実証実験、放射性廃棄物や燃料デブリの分析・研究。

**CLADS 廃炉環境国際共同研究センター**  
Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science (CLADS)

環境回復に向けた研究開発 廃炉に向けた基礎・基盤研究  
—国内外の英知を結集する拠点—  
国際共同研究棟

三春町 (福島環境創造センターの研究棟及び環境放射線センターへ入居し活動)  
富岡町 (茨城県の東海・大洗地区におけるJAEA特有の核燃料・放射性物質の処理施設、放射線施設等も活用)

遠隔操作機器・装置の実証試験等  
大熊分析・研究センター (大熊町)  
放射性廃棄物、燃料デブリ等の分析・研究 (平成30年3月施設管理稼働開始)

プロジェクト1の「廃炉」は廃炉作業の推進や災害時の対応に必要なロボット遠隔操作機器の開発や実証実験を実施する福島遠隔技術開発センターと放射性廃棄物や燃料デブリの性状の分析・評価に係る研究や分析手法の技術開発を担う大熊分析・研究センターと共に廃炉環境国際共同研究センターが、国内外の英知を結集する場として、事故進展シナリオの解明、燃料デブリの取出し、放射性廃棄物の処理処分、遠隔技術による可視化・分析、環境動態研究、環境モニタリング技術の開発など研究開発を行っている。

|   |   |  |   |
|---|---|--|---|
| <b>計量管理・線量評価研究</b><br>格納容器内及び燃料デブリ周辺の線量率を予測するとともに、燃料デブリ中の核物質量を非破壊で測定する技術を開発する。<br>格納容器内の線量率分布予測<br>燃料デブリ中の核物質量を非破壊で測定する技術を開発する。 | <b>水素安全管理技術の研究開発</b><br>放射性廃棄物の長期保管時に、放射線分解により発生する水素の挙動評価と水素濃度上昇抑制のための技術開発に取り組む。<br>水素の挙動評価<br>水素濃度上昇抑制のための技術開発 | <b>燃料デブリの挙動解析</b><br>廃炉作業に資する基礎基盤研究として、燃料デブリの経年変化メカニズムの解明や放射性粒子の分析に取り組む。<br>燃料デブリの経年変化メカニズム等の解明<br>放射性粒子に関する研究 | <b>放射性飛散微粒子の挙動解明</b><br>廃炉作業において、マイクロスケールの放射性飛散微粒子が大量に生成される。閉じ込めを確実にするため、その挙動を明らかにする。<br>放射性飛散微粒子の生成・輸送・移行挙動解明<br>閉じ込め確保戦略と線量評価 |
|---|---|--|---|

### 11/18 浪江町 福島水素エネルギー研究フィールド

浪江町を実証エリアとして1万kw級の水素製造装置を備えた水素エネルギーシステムを構築、太陽光発電の電力でCO<sub>2</sub>削減。1日の水素製造量で560台のFCVに水素を充填できる。



浪江町は「なみえ水素タウン構想」を立上げ、製造された水素を利用し、R2年11月から東芝製純水素燃料電池を「道の駅なみえ」に設置し、電力とお湯の供給をしている。

また、横浜大学やbrother等が水素輸送を地中埋設するのではなく、電柱に共架する「柱上パイプライン」実証検討を浪江町中学校で進めている。

更に、生協による水素配送実証も丸紅の支援で浜通り地域の一般家庭及び商業施設に純水素燃料電池を多数設置し、生協のトラックによる配送・供給事業の可能性調査を行ない全国展開可能な「浪江モデル」として確立を目指している。

大林組は低コストな水素サプライチェーン実証事業を国際航業は立地企業の使用電力が「RE100」となる産業団地整備構想を策定。

原発事故後、東北電力は原発用に用地買収していた浪江町の土地を町に寄附した。浪江町はその土地を復興工場団地として活用するため、NEDOに働きかけた。

大型FCモビリティ向け充填実証研究施設「福島水素エネルギーフィールド」として水素利用研究している。



### 11/18 南相馬市 福島ロボットテストフィールド

#### 福島ロボットテストフィールド ロボット・ドローン



陸・海・空のフィールドロボットの研究開発や操縦訓練等を行う「福島ロボットテストフィールド（世界に類をみない一大研究開発拠点）」の整備とその周辺のロボット関連企業の集積

福島復興をけん引するエンジンとして、わが国を代表するロボット社会実装のためのナショナルセンターを目指し、世界トップレベルのロボット実験環境、実験技術を提供し続ける。

広大な敷地にドローン緩衝ネット付き飛行場、500m滑走路、連続稼働耐久試験棟、風洞棟、屋内水槽試験棟、水没市街地フィールドなど陸海空ロボットの研究開発拠点となっている。

視察した18日には、隣接する工場団地に愛知県ドローン会社「テラ・ラボ」が長距離無人航空機の実用化・事業化の新拠点として新工場竣工式が行われていた。この会社は2019年からフィールドを利用し、研究を重ね、滑走路を直結させた事業所となっている。大規模災害対応ドローンを開発して熱海の伊豆山災害でも活躍した。

このフィールドには、総合運行管理、ドローン電波調整、レベル4飛行安全認証制度、重大事故への事故調査機能などを備えるとともに、ロボットドローンの技術基準、運用ガイドライン等の制度整備や制度運用に資する拠点として目指し、中長期的には、国内ドローンの研究開発・制度執行のメインプレーヤーとしての役割を担い、ナショナルセンター化を目指す。

### 11/19 大熊町・双葉町 環境省中間貯蔵工事情報センター

中間貯蔵施設は、福島県内の放射能汚染で発生した土壌や廃棄物を最終処分するまでの間、安全かつ集中的に貯蔵するための施設。施設内は帰宅困難区域にある。



中間貯蔵工事情報センター

放射性汚染土が入っている袋  
中間貯蔵工事は福島県内各地から除去土壌等の運送、処理・貯蔵、再生利用の取組などを行っている。

広さ1600haの土地に受入・分別施設、土壌貯蔵施設などの施設を整備して、最終処分までの間(2015年から2030年まで)貯蔵する。

2030年以降は県外に搬出することが法律で義務付けられている。

汚染土の再生処理と減量方法は、①800℃で焼却(1/5に減量)、その灰を②1200℃で熔融処理(1/5に減量)する。

放射性セシウムの濃度1kg当たり10万ベクレルを5,000ベクレル以下に処理して耕作土に再利用する実証研究も飯館村でおこなわれている。

放射性汚染土処理の中間貯蔵状況について説明を伺う



高速道路には放射線量表示

